

昭和ノスタルジー

おぼこ
未通海女哭虐

裸の昼と縄の夜



後編

濠門長恭

目次

登場人物	3
学校でも屈辱	4
・ 恥ずかしい夏休み	4
・ 二期期からは通学	6
・ 口開けは校長先生	7
・ 仄かな官能の兆し	12
・ 若主さまの玩弄物	16
・ 輪ゴムとクリップ	20
・ 手の届かない電話	33
・ 海女禪で体育授業	36
・ 切り裂かれた制服	45
官能への階段	50
・ 特別補習は三穴姦	50
・ 制服の残骸を禪に	64

・釘と播粉木の椅子	7
・折檻と体罰の選択	8
・理科と技術の応用	8
・保健室も地獄部屋	9
・喪哀妻の快樂地獄	1
・三穴の絶頂に哭悦	2
・淫乱娘への灸折檻	2
・哭虐と諦虐と悦虐	3
・妊娠と流産と	4
・捏造された濡れ衣	4
・妊娠中は生中出し	5
・厳冬の海女漁強制	5
・流産と新たな種付	8
・遙かな後日譚	1
・令和に継がれた命	1

後書き

登場人物

白石久美子

母を交通事故で失って孤児となり、母の実家に引き取られた。

浜崎和子

伯母。妹（久美子の母）を逆恨みしている。

浜崎勝利

入り婿。孕んでいる和子を押しつけられた。浜一番の網元だが妻の言いなり。

浜崎秀一

浜崎家の長男。久美子と同学年。

岸辺花江

浜崎家の女中。和子のお気に入り。

船中京子

浜崎家の女中。花江より若いだけに、久美子に同情している。

神田沙知

勝利の又従妹。和子になついている。島でただ一人の大卒。教諭。

校長先生

女子生徒に寄り添った指導が問題視されて島流しになった。単身赴任。

物部友雄

女子生徒への愛の鞭が一部父兄から非難されて島流し。独身。

川中弓枝

五歳児の母親。雑貨屋を乗っ取られて喪哀妻に落とされる。

学校でも屈辱

・恥ずかしい夏休み

学校が夏休みのあいだ、久美子はこれまで以上に恥ずかしい思いをしなければならなかった。朝から夕方まで、海岸のいたるところで子供たちが遊んでいる。親からは、かわり合いになってはいけなくと注意されているようだが、それでも男の子たちは久美子を取り囲んではやし立てたりする。

「やーい、はだかんぼう。いんらんおんなのふしだらむすめ」

「まん●でまんま」

「せっかんビシビシ、おまたヒリヒリ」

久美子の母がしたとされていること、久美子が現にしているとされていることが、子供にまで筒抜けだった。女将や花江が御用聞きにちよつと（悪意を込めて）漏らすだけで、その日のうちに島じゅうに噂が尾鰭を大きくしながら広まるのだ。

いちばん恥ずかしいのは、久美子と同じ年頃の少年少女が船溜まりで親の手伝いをして、いることだった。少女はあわてて目をそらすか何かしらの用事を見つけて逃げていくが、少年はかたわらにいる親の目を気にしながらも、久美子の裸身を穴のあくほど見詰める。ほかの海女には目もくれない。法被を着ているいないの差ではなく、彼女たちはおっかな

いオバサンであり、久美子は性欲の対象なのだった。

親に厳しく言われているのだろう。時間がいくらでもある夏休みになっても、娘小屋に近づく少年はいなかった。秀一を除いては。秀一は、四、五日に一度は久美子に肛姦を強いる。久美子が整理して積み上げたガラクタの陰に隠れての行為だから、女将の目を盗んでのことだろう。けれど、露見して折檻されるのは久美子なのだ。秀一を拒んで、女将に告げ口されても同じ結果になる。

たいていの男は、後ろを犯すときは前も指でくじったりするのだが、秀一だけはそこに触れようとしなかった。父親（ではないらしいが）の性器が突っ込まれた部位をさわりたくないのかもしれない。

漁に出ない日は、昼間から物々交換の売春をもちかけられる。これも、久美子に断わる権利は無い。娘小屋に生活必需品が足りてくると、男たちははしわくなった。もつとたくさんやるから抱かせる——とはならなかった。女将が糸を引いているのか、男たちが談合して順番を決めているのかまではわからないが、男たちの数は昼間に三人から五人、夜這いも同じくらいに収まっていた。

夜に外から施錠されることもなくなった。それでも、夜這いの男たちはいちいち久美子に鍵を見せる。いわば、女将が発行する夜這いの許可証みたいなものだった。

夜這いにもすっかり馴れてしまつて、なんの感動もなく淡々と仕事をこなすようになっていた。久美子だったが、心に余裕ができた分だけ、妊娠への恐怖を現実のものとして考えるようになっていた。

もつとも。今のところ久美子は妊娠していない（らしい）。若かりし頃の女将の妊娠は、

当人が自覚するよりも早く同僚の海女に気づかれていたそうだ。裸で接しているのだから、同じ女として微妙な変化でも察知するのだ。

「まだ、大丈夫だよ」

ハツが受け合ってくれた。それでも、八月の初旬に二度目の生理がきたときは、ほっとした。

まだ生理周期が安定していないのか、下旬には三度目の生理になった。

・二学期からは通学

島の者が言う不浄期間が終わってすぐの八月三十一日。明日から二学期が始まるという日。久美子は屋敷に呼び出された。

勝手口から声をかけると、女将と見知らぬ男が現われた。都会の人間のように、きちんとネクタイを締めている。ぶよぶよした身体は、農業や漁業のような肉体労働者でないことを語っている。

「校長先生だよ、ご挨拶しな」

事前に女将から事情を聴いていたのだろう。生徒と同じ年齢の少女の裸身に驚いた様子もなく、貪るように眺めている。

性欲の対象にされている——それがわかるようになっていく久美子だった。それでも、女将に命じられたことには無条件に服従する。

「白石久美子です。よろしくお願ひします」

「うん、よろしくしてあげましょう」

なんだか漫才みたいな返事だった。

久美子の前に風呂敷包みと運動靴が放られた。

「明日からは、学校に通いな」

え……と、久美子は女将の顔を見た。

「校長先生はお堅くてね。ちゃんと制服を着なけりや駄目だとさ」

久美子は風呂敷包みを開けてみた。取り上げられていた制服だった。

「あ……ありがとうございます」

久美子は深々と頭を下げた。女将さんに本心からのお礼を言うのは、これが初めてだった。

しかし、感謝の気持ちは次の言葉で碎け散った。

「なにしろ、ふしだらな盗人の娘ですからね。うんと厳しく躰けてやってください。もげちゃあ困りますが、手足の一本くらい折れたって文句は言いませんよ」

・口開けは校長先生

翌朝。久美子はほとんど三か月ぶりに、裸ではない姿で道を歩いていた。下着までは返してもらえなかったもので、海女褌だけの素肌に制服を着ている。それでも、外見はふつう

の女学生と、ほとんど変わらない。違いは胸当てを剥ぎ取られていることと、もはや乙女とはいえない色香が全身からにじみ出ていることくらいだろうか。顔が赤銅色なのは、漁村の少年少女なら誰も同じだ。

海女仕事で身体を鍛えられて、とくに肺活量が増えているのだろう。胸がきついし、一歩ごとに乳首が服の生地を擦れて、少し痛い。乳首をつねられたり叩かれるのとはまるきり違う、ごく軽い痛さでしかないのだが、それがかえってうっとうしかった。

入学のときに（母が大奮発して、吊るしてはなく）誂えてもらったスカートは、丈をいっばいに伸ばしても裾は膝小僧から五センチほども上だが、それでも禪で外を歩くよりは、よほどみっとも良い。

午前七時に校長室へ来るよう、命じられている。転校初日だから、事前の手続とかがあるのだろうと、久美子は簡単に考えていた。

商店街を突っ切って、以前に引き回された農村へ折れる道を通り過ぎてから、島の裏側にある漁村と中間のあたりで右に折れて――十五分ほど山道を登って、ようやく学校に着く。片道に一時間ちかくもかかる。もっとも、五時過ぎに起きるなんて、今の久美子の感覚ではちっとも早起きではない。カンジという男からもらった中古の目覚ましは鳴るよりも早く目が覚めた。この目覚ましには、忌まわしい記憶がともなっている。棕櫚縄を巻きつけて極端に太くなった、男の……。

定期船の発着に合わせて営業する店が多いから、早朝の商店街は閑散としている。雑貨屋の雨戸に『忌中』の貼り紙があるのに気づいたのは、服を着ているという心の余裕があったからかもしれない。今では迷惑を掛けるのを恐れて、できるだけ近寄らないようにし

ているが、最初に裸で買物に出されたときには、この奥さんだけが、久美子に同情して優しくしてくれた。まさか、奥さん本人ではないだろう。旦那さんがずっと寝込んでいると噂に聞いたことがある。久美子とは面識がないが——奥さんの悲しみを思うと、自分が置かれている境遇への悲嘆とは別の色で、淡い悲しみが胸をふさいだ。

久美子が校門をくぐったとき、木造二階建ての校舎の壁に掛かった大時計は、七時十分を指していた。じゅうぶんに余裕を見込んで出てきたつもりだったが、海女仕事で鍛えた体力も、坂道を上る役には立たないらしい。それとも、汽笛に時計を合わせたから、ずれていたのだろうか。

上履きを持たない久美子は、運動靴を下足箱へ入れると、裸足で廊下上がった。

校長室は二階にあった。校長は開襟シャツ姿だった。ネクタイを締めるのは、家庭訪問のようなあらたまった場面でだけらしい。

「遅刻だね。夕べは仕事に励み過ぎたのかな」

校長の言う仕事が海女のことではないと、久美子にもわかる。たしかに、昨夜も三人の相手をさせられた。でも漁師は朝が早いから、午後十時には寝ている。

「その仕事のことです」

校長が、いやにいいいな言葉づかいになった。

「学校の中でも外でも、生徒を相手に娼売をしてはいけません」

なにを馬鹿なことを——と久美子は思ったが、校長はからかっているのではないらしい。「とくに学校の中では、絶対に淫らな真似をしてはいけません。外でなら、さわらせたり抜いてあげるくらいは大目に見ますが、それでも生徒を相手の性行為だけは駄目です。不

純異性交遊になります」

久美子は二重の意味でぼかんとしていた。

抜くという言葉の意味がわからなかった。たぶん、淫らなことなのだろうけど。それよりも、学校の外でなら級友に淫らなことをさせてもかまわないだなんて、学校の先生の言うことだろうか。

「あまり時間がありませんね。ちゃっちゃと服を脱ぎなさい」

久美子は聞き間違いかと思った。しかし、駄目押しともいえる言葉が続いた。

「裸になって、そのソファに寝なさい」

校長先生は、あたしを犯そうとしている。と、そこまで頭に浮かんでも、信じられなかった。

「でも、ここ……学校じゃないですか」

「学内で禁止したのは、生徒との性行為です。先生を相手ならかまいません」

無茶苦茶だとは思ったけれど。校長先生の横に立っていた女将さんの姿を思い出すと、なにも言えなくなった。

服を着ているぶんだけ羞恥心が甦って。制服を脱ぐときには指が震えた。けれど、海女禪姿になると覚悟も座った。二か月前までは外で平然と（ではなかったけれど）大勢の目にさらしていた部分だ。部屋の中で一人を相手に、今さら恥ずかしくなんかない。そうは思っただけけれど。

「ほほう。つるつるだね。まさか、まだ生えてないってことはないね？」

「……自分で剃っています」

二、三ミリも伸びると、男たちから苦情が出る。久美子にはさんざん痛いことや不快なことをするくせに、自分がチクチクするのは厭なのだ。

もちろん、それは言わなかったが、校長は事情を察したようだ。

「ふんふん。なかなか媚売熱心なことだね」

校長はズボンと開襟シャツを脱がずにソファに座って、まだ禪を持って突っ立っている久美子を自分の膝に座らせた。

腰を引き寄せられて、突き出た腹を背中に押しつけられても、久美子は逆らわない。けれど、油っこいような爽やかなようなポマードの香りがきついたので、口をすこし開けて息をした。

「もうじゅうぶんにオトナの身体だね」

校長が左手で肩を抱いて、右手で久美子の乳房を揉む。

校長の言葉のとおり。この三か月足らずで、久美子の身体つきはずいぶんと変わってきた。上半分がえぐれ気味だった乳房の膨らみも、すっかり球形になってきた。尻にも丸みと厚みが増した。その一方で、腰は以前よりも細くなっただけだ。そして淫裂からは一センチばかり貝の脚のような肉片がのぞいている。つまり、性熟したのだ。

校長の手つきは、ほかの男の誰とも違って、緩やかで繊細だった。指が丸みをなぞるだけ、久美子の背筋にさざ波が走った。

「ひゃんん……」

乳首を指の腹で転がされて、悲鳴が鼻に抜けた。

校長が久美子の顎をつかんで振り返らせて、唇を重ねようとした。

久美子は、反射的に顔をそむけた。

「駄目です。あたし、汚れてるから……」

ほかの男たちは、久美子にキスをしようとはしなかった。誰が、男の排泄器官を啜えた口を吸おうとするだろうか。

「久美子ちゃんは、どこもかしこも綺麗だよ」

強引に唇を奪われても、久美子は逆らわなかった。人間の女性として扱われているようで、ちよっぴり嬉しく感じた。舌を挿れられて、口の中を歯の裏側まで舐められ、舌を絡め取られても、されるがままになっていた。女将の折檻が怖いのはたしかだが、女の本能として受け身になっている部分もあった。

・仄かな官能の兆し

校長は久美子を膝の上から下ろして、ソファに寝かせた。その横にひざまずいて、あらためてキスをしてから。久美子の乳房に肌を這わせた。

「あ……」

痛くもくすぐったくもなかったが。（実際にそんな体験をしたことはなかったけれど）カタツムリに這われているような気色の悪さがあった。

校長が乳首を啜えた。

「ひゃんっ……んんん」

舐められて。鼻に抜けた悲鳴が吐息になった。指で摘ままれたり転がされたりしたときとは違って、ピリピリする電気ショックではなく、くすぐったさの混じった心地良い刺激だった。気色の悪さは消えていた。

校長の舌が右の乳首を離れて左へ移った。今度は左の乳首にくすぐったい心地良さが生じた。そして、右の乳首に物足りなさを感じた。

校長はさらに顔をずらして、久美子の肌を舐めていく。

へその穴を舌先でつつかれて、久美子はくすぐったさに身悶えした。舌はさらに肌を舐め進んで。

「やつ……」

久美子は顔から両手をはなして半身を起こし、校長の肩を押し返そうとした。

「そこ、ほんとに駄目です」

校長が上体を起こす。

「いいから、おとなしくしていなさい。きみの着ている制服はうちのとは違うね。没収してもいいんだよ」

裸で授業を受けるか、通学を諦めるか。どちらも厭だった。久美子はソファにあお向けになって、また両手で顔をおおった。

「聞き分けのいい娘だね」

固く閉ざされた腿を、校長の手が押し開く。鼻息が淫埠をくすぐって……

「あ……」

予期してはいたが。淫裂からはみ出ている肉襞を舐められて、おぞましさとくすぐった

さが腰をびくりと震わせた。

考えてみたら。逆のことは、しょっちゅう男に求められてきた。そこからほとぼる精汁さえ飲まされてきた。その男たちに代わって、校長先生が罪滅ぼししてくれている。そんな気分になった。のも、束の間。

淫裂の中にまで舌が到達すると。くすぐったさが、さざ波のように揺れて、それが心地よく感じられてきた。

校長はいったん顔をはなして。両手で淫唇をかき分けると、その頂点にある突起をすすった。

ずちゅうううう……

「ひゃあつ……あああ、ああんん」

電気が走るというよりも、甘く鋭い感覚が立て続けに跳ねた。

「ああつ……なに、これ？ あああつ……」

朝にまみれた肌を風に吹かれて気持ちが良い。凍えた手をストーブにかざして気持ちが良い。そういった気持ちの良さとはまるで違っているけれど……腰が震えるような、気持ち良さの塊りだった。久美子の中で、電気とかくすぐったさが、ついに性感として目覚めたのだった。

久美子の反応に呼応して、校長もいっそう久美子を刺激する。肉芽をすすりながら、左手で乳房をさつきよりも強く揉み、右手は尻を抱きかかえて撫でた。

「うああああ……身体、どうかなっちゃう」

もしも校長が女体についてもっと知り尽くしていれば、そのまま刺激を続けて、久美子

をいっそう登り詰めさせただろうが。彼はおのれの欲望を優先した。いや、若い娘にとつては挿入よりも淫芽への刺激のほうが逝かせやすいとは知らなかったのかもしれない。

「あ……やめないで……」

久美子が思わず口走った淫らな訴えには応えず、校長はズボンと猿股を脱いだ。

「待ってなさい。もつと気持ち良くしてあげるから」

まだ半勃ちの肉棒をみずからの手でしごいて猛り勃たせると、久美子におおいかぶさつた。久美子の右脚をソファの背もたれに掛けて、その開脚した中芯に老木（とまでいって、彼がかわいそうだが）を突き挿れた。

「ああ……」

久美子の吐息は——せつかく芽生えて急速に成長しつつかつた性感を取り上げられた嘆きだった。挿入と抽挿とに快感を得るところまで、まだ久美子は達していない。いつもの我慢の時間が始まっただけだった。

校長は五分ほどでおのれの欲望を吐き出してしまった。生徒を犯しているという背徳感と、若い娘から性の悦びを引き出したことで、挿入前から興奮の極にあったのだ。

事を終えると、校長もほかの男たちと同じように、久美子の身体に興味を失った。

服装を整えて、腕時計を見て。

「きみも、はやく服を着なさい。講堂へは先生が引率するから、それまで外で待っていないさい」

机に座ると、何枚かの書類を引き出しから取り出して、事務仕事を始めた。

久美子は制服だけを着て、禪は折りたたんで鞆に入れた。

「失礼します」

当てつけとかは意識せず、ふつうに挨拶をして校長室を出た。便所を探して、股間を清めてから、スカートは脱いで上着の裾をたくし上げて、禪を締めた。そして、校長室の扉の前へ引き返した。

・若主さまの玩弄物

校長に引率されて体育館を兼ねた講堂へ入ると、前の学校よりも狭い建物に生徒があふれていた。久美子は別の先生に案内されて、最前列でほかの生徒からすこし離れた席に着いた。さっそくに、男子生徒の視線が集中する。

校長先生が、前の学校でも聞いたような挨拶を長々として。それから転校生である久美子の紹介。

壇上に立つと、生徒たちがいつせいにざわめいた。前の学校で久美子が転校生を迎える立場だったときは、明らかに雰囲気違っていた。

「へええ。ちゃんと制服を着てるんだ」

「よく学校へ来れたものね」

「真っ黒けだけど、けっこう可愛いじゃん」

「米一合で一発って、ほんとかな？」

久美子は、できるだけ平静を装って挨拶の言葉を述べた。

「浜崎様のところでお世話になっている白石久美子です。卒業までの短いあいだですが、皆さんと一緒に楽しく勉強していきたいと思えます」

「なんの勉強だよ。俺にも教えろよ」

そんな野次は無視して、ペこりとお辞儀をして、久美子は壇上から逃げた。

椅子に戻ってからも、皆から離れている久美子は晒し者だった。身じろぎひとつせず壇上を注視する久美子の耳に、先生方の話は素通りだった。

教室へ戻って。始業式とは逆に、久美子の机は教室のいちばん後ろになった。横の列には誰もいない。隔離されたと感じたのは、けっしてひがみではないだろう。さすがに授業中に久美子を振り返って眺める生徒もいないだろうから、そういう意味ではありがたいのだけだ。

初日の授業はロング・ホームルームだけ。学級委員をはじめとする各委員の選挙があったが、もちろん久美子は立候補しなかったし、転校生をわざわざ推薦する生徒もいない。

午前十時半にはホームルームも終わって。久美子は遠慮して、最後に教室を出ようとしたのだが、男子の五人が席に着いたままだった。そこへ、隣のクラスから、秀一が五人の男子を引き連れて教室にはいつてきた。

「おまえの仕事着を見せてやれよ」

机で固まっている久美子に、秀一が命令口調で言った。

秀一を除く十人が、久美子の机を取り囲んだ。

久美子は動かない。どう対処しようか考えても、頭は空回りする。

秀一が背後に回り込んで、久美子の肩に手を置いた。馴れ馴れしく耳元に口を寄せてさ

さやく。

「お・か・み・さ・ん」

秀一は母親に面と向かつては『かあちゃん』と呼んでいる。久美子や級友に使う三人称は『お袋』だ。それをこの場で『おかみさん』と言う理由は、ひとつしか考えられない。久美子への脅しなのだ。

久美子は黙って立ち上がった。せつかく着ているのに脱ぐのは惜しい。思ったのはそれくらいで、羞恥の感情は折檻への恐怖に押しつぶされている。久美子は、平静を装ってスカートを脱いだ。

「うおおっ……」

「フンドシだ」

「おれ、同級生の裸を見たのは初めてだよ」

興奮の音が教室に響く。

「仕事着って言ったぞ。その恰好で海に潜るんか？」

今度は、全員に聞こえる声で秀一が言った。言っただけでなく、上着の裾から両手を突っ込んで、乳房を揉んだ。

「やめ……」

やめてくださいと言いかけた声が、か細く立ち消えた。逆らってはいけけない。校長先生の言葉もよみがえったけれど。学校の中で淫らな真似をしても（事実、さ、れ、て、い、る、の、だ、けれど）、素裸で縛られた急所を縄で叩かれたりはしない。

「手をはなしてくれないと、脱げません」

同じ制止の言葉でも、まりきる逆の意味になった。

秀一が後ろに下がって。久美子は淡々と、禪一本の姿になった。教室に雄叫びが轟いた。

それをあおるように、秀逸が後ろから抱きついて、級友に見せびらかすように双つの乳房をわしづかみにした。

「く……」

その程度は、今の久美子にとってはちよつと痛いだけの仕打ちになっている。

久美子は（すくなくとも表面上は）嫌がっていない。そうなると、ほかの男子も指を啜えて見ているだけではなくなる。

「ぼ、ぼくもさわっていいかな」

「どんどんさわってやれよ。ほら」

久美子に代わって秀一が答える。当人は場所をゆずって、久美子の正面にしゃがみ込んだ。

二人が後ろで押し合いへし合いしながら、乳房の根元をつかみ、別の二人が秀一を挟む格好で乳首のあたりを摘まんだ。

こんなにたくさんの手で觸られるのは初めての体験だが、意図的に虐めるつもりはないらしく、乳房を握る手の力はそのなりに強くない。

秀一が久美子の股間に顔を押しつけて両手を尻にまわすと、禪をほどき始めた。

久美子は、諦めの溜め息すら吐かない。

禪をほどくと、秀一は股間を間近に眺めて。それだけでは満足せず、右手の人差し指を

挿れてきた。

「うわ……ぬるぬるしてる」

「濡れるのは感じてる証拠だって聞いたこと、あるよ」

「ぼくにも見せてくれ」

あぶれていた六人のうちの二人が、乳房を弄んでいる生徒と秀一とのあいだに割り込んできた。さらに二人が、横合いから尻を撫でる。

「いつまでやってんだ。交替しろよ」

砂糖に群がる蟻そのものの光景だった。砂糖のほうが黒くて、群がっている蟻は白いシヤツを着ているのだが。

・輪ゴムとクリップ

いつ終わるとも知れない幼稚な戯れは、突如として中断された。

「こらあつ！ なにをやってるんだ！」

たちまち、白い蟻どもが逃げ散った。怒鳴った教師は腕組みをして前の入り口をふさいでいるが、男子生徒たちが後ろの扉のねじ錠を開けるあいだ、なにも言わなかった。

久美子がひとり取り残されてから、教師がおもむろに動いた。

「学校では淫らなことはするなと、校長先生に注意されていたはずだぞ」

「ごめんなさい。でも、浜崎さんに命令されて……」

バチン！

頬を叩かれた。女将さんの拳骨と同じくらいに痛かった。

「言い訳をするな。ちよつと来い」

トレパン（白の体操用長ズボン）に開襟シャツ姿の教師が、久美子の乳首を摘まんだ。強く摘まんで、前へ引つ張る。

「待ってください。服を着させてください」

きつと、この先生も敵なんだ。自分の願いなんか無視されるだろう。すでに久美子は諦めていたが、その通りになった。

「どうせ、自分から脱いだんだろうに。無理矢理に脱がされたのなら、どこか破れているはずだ」

当てずっぽうにしても、凶星だった。

久美子は乳首を引つ張られて教室から引きずり出され、まだ居残っていた数人の生徒に見られながら、廊下の突き当りにある小部屋へ連れ込まれた。備品置き場だろう。大きな教材や古ぼけた教科書を並べた本棚が雑然と並べられている。

教師は久美子を部屋のまん中に立たせて、向かい合った。

「おまえの考えなど、お見通しだぞ。秀一に告げ口されて、浜崎の女将さんに折檻されるよりは、先生から罰を受けるほうが、ずっと甘つちよるい。そうだな」

これは当てずっぽうではないだろう。女将の凄まじい折檻を話半分に聞いたとしても、誰もがそう考える。

「ふん、だんまりか。そういえば、売淫のときもよがり声ひとつあげないそうだな」

これまでは、そうだった。でも、さつき校長先生に犯されたときは違っていた。いや、違わない。あれこれ弄られたときは、すごく気持ちが良くなっていたけど、『性行為』のときは、これまでとたいして違わなかった。数秒、そんなことを考えていたのを、教師はどう受け止めたのか。

「女将に折檻されたほうが、よっぽど楽だと思わせてやる」

「ご、ごめんなさい……」

久美子は、反射的に土下座していた。そんな卑屈が身にも心にも浸み込んでいた。

「もう、絶対にしません。だから、虐めないでください」

「勘違いするんじゃないぞ。俺は、おまえに適した教育を施してやるだけだ」

言葉は幾分かやわらいでいたが、女将と同じ冷酷で残忍な響きを久美子は聞き取った。

おさげをつかんで立たされた。

教師はトレパンの後ろポケットから紅白のハチマキを取り出した。そんな物を持っていくし、この格好だから、この人は体育の先生かなと、久美子は見当をつけた。体育だろうと音楽だろうと、どうでもいいことだけだ。

体育教師はハチマキを、久美子が予想した通りに使った。後ろ手に縛ったのだ。

久美子にしてみれば、腕をひねり上げられもせず、肌ざわりも荒縄よりずっとやわらかかった。

つぎに教師は、本棚に置かれていた小箱から輪ゴムを幾つも取り出して、それを久美子の乳房に嵌めようとした。しかし手をはなすと、輪ゴムは肌を滑ってはずれてしまう。

チツと舌打ちをして、教師は忌々し気に久美子の乳首を指で弾いた。

「おお、そうだ」

何を思ったか、右の手首に数十本の輪ゴムを嵌めた。そして、久美子の左の乳房をわしづかみにした。左手を使って、輪ゴムの一本を乳房の付け根まで動かした。指が乳房に食い込んでいたので、輪ゴムはそこに留まっている。

教師は、次々と輪ゴムを乳房に食い込ませていく。

「い、痛い……」

わしづかみの何倍も強い力で乳房を圧迫されて、激痛に馴致された久美子が呻いた。

教師が手をはなすと——乳房は野球のボールよりもひと回り大きな球形になっていた。

「ひねると、もげそうだな」

九十度もひねられて、とうとう久美子は悲鳴をあげた。

「ひさしぶりに聞く音色だ」

その言葉は、この教師がほかの女子生徒にも悲鳴をあげさせるような行為をしてきたことを暗示している。

これは、生徒にまでは知られていないことなのだが。性的虐待混じりの体罰が、この時代にあっても行き過ぎた行為と咎められて、この教師は『島流し』にされているのだ。地元民の結束が強い田舎なら、そうも無茶はできないだろうという教育委員会の判断だった。

その判断は正しかったのだが——久美子のような『生贄』が現われるとまでは予想していなかったのだろう。もつとも、PTAからの苦情さえ出なければ、それでいいのだが。

教師は右の乳房も、同じように輪ゴムで球形にくびった。

これくらい、竹尺で叩かれるほど痛くない。と、見くびった久美子だが。教育は、ま

だ始まったばかりだった。

教師は古びた机の引き出しから、六センチほどの大きさの目玉クリップを取り出した。その目玉に作文集を作るときの紐を結んだ。

「動くんじやないぞ。おとなしくしていれば、昼休みが終わるまでには帰してやる」

教師は久美子の乳房をつかんで固定して、クワツと口を開けた目玉クリップを近づけた。そこまでされて、やっと久美子は教師の意図を悟った。叩かれたりつねられたりはしょつちゅうだけど、こんなふう to 道具を使われたことはなかった。それだどれほど痛いかは——すぐにわかった。

「きやあああああつ……！」

久美子は切迫した悲鳴をあげた。しかし、野獣の吠え声にまではなっていない。

乳首を水平に噛んだ目玉クリップは、乳房の弾力に支えられて、まだ水平に立っている。

「敏江には五円玉十枚ずつで赦してやったが……さて」

教師は独り言をいいながら、室内を物色した。

「おお。これは、ちよつと厳しいぞ」

喜色満面の教師が手にしているのは、書道に使う文鎮だった。五つほどもあった。

「うまい具合に、ツマミがある」

文鎮の中央にあるツマミに紐が結び付けられた。教師が手を放すと……

「びぎいいいいつ……痛い！ 痛い痛い……赦してください」

痛みに身悶えすると文鎮が揺れて、さらに乳首が責められる。

「もう片方、残ってるぞ」

両方の乳首に文鎮を吊るされた。わずかでも文鎮を揺らさないよう、久美子はじっと立っていることしかできない。涙と鼻水で顔をくしゃくしゃにしなが

「実はな、ここからが本式の教育なんだよ。先生も、一度はしてみたかったんだ」
つまり。他校の（親がいる）生徒にはできなかった残虐なことを目論んでいる。

教師は同じ大きさの目玉クリップを二つ、今度は先に文鎮を結び付けた。

「もつと脚を開け」

教師の狙いを知って、久美子は文鎮が揺れるのもかまわず、イヤイヤをした。

「お願いします。どうか赦してください。赦してくれるんだったら……」

言葉に詰まって、とっさに頭に浮かんだのは。

「どんなサーブスでもします。尺八でもオカマでも帆掛け船でも、あたしの身体を好きに
していいですから……」

バチンとビンタを張られて、久美子は正気に還った。淫売を交換条件にするなんて……
どうしようもなく惨めになった。と同時に。

「そういうふしだらな態度を直してやろうとしているんだぞ」

閉じ合わせている久美子の腿に膝をねじ入れて、教師は強引に久美子を開脚させた。さ
つきの秀一と同じように、正面にしゃがんで。ずっとひどいことをした。

「ううう、うう……」

淫裂から顔を出している肉壁に目玉クリップを噛まされても、乳首ほどには痛くなかつ
た。

しかし。教師がこれまでの倍ちかくあるクリップを取り出すのを見て、身体がぐらりと

揺れた。

文鎮を吊るした目玉クリップが、股間のご真ん中に近づく。教師は、淫核を剥く手間を惜しまなかった。

目玉クリップが、縦に実核を咬んだ。

「がわあああああつ……」

久美子は吠えた。息を吐き出し終わると、そのまま後ろへ倒れかけた。

危ういところで、教師が抱き止めた。ほとんど気絶している久美子の無惨な裸身を窓際へ引きずっていった。カーテンを絞って、頭越しに手首に巻き付けた。それで、手をはなしても久美子は倒れなくなった。

教師が備品置き場から出て行った。十分もしないうちに、縄束を持って戻って来た。

「ふん。やっぱりズルをしていたな」

久美子は窓に頭を押しつけて、乳首の文鎮を窓枠に乘せていたのだ。

「ひさしぶりのことで、俺も気が急いでいたな。最初から用意しておくべきだった」

縄を久美子の腰に巻いて、引っ張った。

後ろへ下がるにつれて久美子の腕が斜めに吊り上げられて、上体が傾ぐ。

「うああああ……赦して……赦してください」

意識が朦朧としたまま哀願する久美子。そういった弱々しい訴えが嗜虐癖のある男を喜ばせると、久美子は知らない。もっとも、強情を張り通してもいっそう強く責められるだけなのだが。

教師は縄尻を本棚に結んだ。それだけなら、思い切り踏ん張れば本棚を引きずって、す

こしは楽な姿勢になれたかもしれないが。さらに開脚させられて、両足を箒の柄に縛りつけられた。ますます身体が沈んで腕が引き上げられ、肩の付け根が軋んだ。

「さんざん手を焼かせてくれたから、昼休みまでで勘弁してやるわけにはいかんな」

まだ、四時限目が始まるチャイムも鳴っていない。これから二時間だって絶対に無理なのに——けれど、久美子は抗議しなかった。哀願でさえ、折檻を酷くする口実にされる。

「これから、お尻ペンペンするぞ。泣かずにじっといい子にしていたら、昼休みの終わりまでで勘弁してやる。声を出したり逃げようとしたら、六時限が終わるまでだ」

ずっと黙っている久美子が面白くないのか、教師は丸くくびられて鬱血している乳房を、握りつぶした。男の本気の力だ。折檻に馴れた少女でも耐えられない痛さだった。

「ぎひい……痛い！」

「返事は？」

「は、はい……わかりました。声を出さず動かさず、いい子にしています」

「そうだ。素直になれば、先生だってやさしくしてやるぞ」

言葉とは裏腹に、両手で久美子の腰をつかんで激しく揺すって、股間の三つの文鎮を暴れさせた。

「ぎやああつ……素直になります。だから……」

やめてくださいと訴えれば、もっとひどいことをされると、久美子の経験が教えていた。

「だから……早く、お尻ペンペンしてください！」

そうねだるよりなかった。

「そうかそうか」

教師は、やっと久美子の身体からはなれた。

「お尻ペンペンは、これでしてやる」

久美子を開脚させているのと同じ、柄の長い箒を逆手に持って教師は、股間に垂れている三つの文鎮のうち、真ん中のをコンコンと叩いた。

「うああ……？」

激痛が震えて、その奥に別の感覚がひそんでいた。校長にやさしく罵られたときの官能に、似ていなくもなかった。

教師が、おや？——という顔をした。何人もの女子生徒に『愛の鞭』を振るってきた男は、他の少女にはない何かを、久美子に見たのだろうか。しかし、一年半にわたる、いわば禁欲生活は、まずおのれの劣情を満足させるほうを優先した。

「いくぞ。動いたり声を出したら、六時限の終了まで立たせておくぞ」

教師は片手で持った箒を振り上げて、手加減無しで柄を黒褐色の尻に叩きつけた。

バシン！

「……………」

久美子は身じろぎひとつせず、呻き声も漏らさなかった。耐えた——のではない。水を吸った荒縄の束に比べれば痛みは一瞬で鋭く、どこか爽快でさえあったのだ。

バシン！

バシン！

バシン！

尻を叩かれること自体は、今の久美子にとっては折檻の名に値しないほどだったが。叩

かれた衝撃で文鎮が揺れて、乳首と実核とで激痛が震える。しかし、痛みの奥底からにじみ出てくる官能が、久美子を当惑させていた。そのかすかな官能があったから、どうにか耐えていられたのだが。

「なかなか頑張るじゃないか」

手を休めた教師が、久美子の横にまわった。

(……………?!)

トレパンの前が異様に膨らんでいるのに気づいて、久美子是不思議に思った。全裸になったときも、身体のうちこちに凶悪な仕掛けを施されていたときも、トレパンはこんなにも盛り上がってはいなかった。先生は、あたしを叩いて、それで性的に興奮しているんだろうか。

そういう性癖の男がいる——いや、すべての男の心には嗜虐が潜んでいるとは、久美子に限らず、たいていの女は知らない。

教師はトレパンをずり下げて、腹にくっつくほどの急角度に聳え立った巨木を露わにした。

「今度はこれで、お尻ペンペンしてやろうか？」

「お願いします。先生のマラで、お尻ペンペンしてください」

即答だった。マラでお尻ペンペン（ズボズボだと、久美子は正しく理解している）して、樹液を吐き出してくれたら、それで赦してもらえる。これまでの淫惨な経験で、久美子はそう思った。

「さすがは淫売娘だな。恥ずかしがりもせず、マラとはな」

久美子を抱く男たちは、たいていその言葉を使う。久美子にしても、チ●コと言うよりは、よほど口にしやすい。

「まあ、いいだろう。先生も言葉遊びは好きじゃない」

教師は、シャツの胸ポケットから小さな紙箱を取り出した。箱を開けて、輪ゴムの中に薄い膜が張ってあるような物を取り出して、それをマラの先に嵌めた。輪ゴムを巻き下げると、マラ全体が半透明の膜に包まれた。

これが、ときどき耳にしているコンドームというものだろうと、久美子は見当をつけた。

これなら、性行為をしても妊娠の恐れがない。でも、後ろで使うというのは――マラを汚さないためだろう。久美子への配慮でない。

教師は、すぐに挿入しようとはしなかった。今度はトレパンのポケットから小さな平べったい缶を取り出して、中の軟膏を指で掬って肛門に塗り始めた。塗るだけでなく、指を挿れて内側からも揉みほぐす。

「あ……」

肛門の縁を冷たい風が吹き抜けるような感覚に、久美子は戸惑った。その感覚には、覚えがあった。しかし爽快感は、すぐに浸み込むような熱を伴う疼きに変わった。

「あ……はああ」

指の動きが止まって、久美子は何だかしさに腰を揺すり……文鎮が揺れた。

「つうつ……」

痛みに呻く声が艶を帯びていた。

「経験の差か……それとも？」

教師が低い声でつぶやいた。彼がこれまでに『愛の鞭』を振るった生徒は、処女ばかりだった。『お股ペンペン』にまで至った獲物は、二人人だけだった。それも交わりとしては正常な行為しかしていない。肛門に刺激性の軟膏を塗ったことは(自身での実験を除けば)なかった。だから、久美子の反応が尋常のものか異常なのか、判断がつかなかった。

教師は、疑問を追及しようとはしなかった。この生贄なら、いつでも教育を施せるのだ。

教師は久美子の後ろにまわって、両手で腰をつかんだ。コンドームに包まれた魔羅の先を焦げ茶色の蕾に押しつけた。

「いくぞ」

たぎる欲望にまかせて、ぐいっと腰を突き出した。

「ひいいっ……熱い！」

可憐な悲鳴とともに、久美子の蕾は大きく広がって巨木を受け挿れた。

「はううう……」

奥まで挿入されて、いったん教師が動きを止めると、久美子は安堵の息を吐いた。熱痛は去って、拡張される痛みというよりも違和感だけが残っていた。そのくらいには、肛姦にも馴らされている。

教師が挿挿を始めた。軟膏のおかげで痛みはほとんど無かったが、全身を揺すられて文鎮が暴れまくる。

「きひいっ……痛い痛い……先生、早く終わってください」

乳首も実核も引き千切られそうな激痛。官能が蠢く余地はなかった。

「お、おう……もうすこしの我慢だぞ」

久美子は驚いた。折檻でも夜這いでも、哀願を聞き入れてもらえたのは、これが初めてだった。

「痛い……ひいい……」

教師の動きが荒々しくなっても、久美子の悲鳴は弱々しく可憐だった。

そうして。数分の嵐が去って。

数多の男がそうであるように、教師は急にやさしくなった。なんと、目玉クリップを外して、カーテンの拘束まで解いてくれたのだ。

「素直になった褒美だ。今日は、これで赦してやる」

「ありがとうございます！」

咄嗟に打算がはたらいで、久美子は土下座した。この人は、女将さんみたいな冷血じゃない。校長先生と同じくらいに慈悲深いのもかもしれない。久美子は、とんでもなくずれた基準で教師を評価したのだった。

教師も、犯した生徒に感謝されたのは初めてのことだったろう。戸惑った表情で久美子を見下ろしていたが。

「先生は先に出る。ひと休みしてから帰りなさい」

言い残して、さっさと備品置き場から出て行ったのだった。

久美子は裸のまま、しばらくうずくまっていた。乳首と淫核の痛み、軟膏のせいでも何でも続く肛門の熱痛。そして、不自然な形に腕をねじ上げられていた肩の痛み。

それでも、女将さんの残酷な折檻よりは、はるかにまし、だと久美子は思っている。股間を打ち据えられる激痛と、突起を咬まれて引き伸ばされる劇痛と。どちらが厳しいかは、

甲乙つけがたい。瞬間的な痛さは、水に濡らした荒縄だ。けれど、目玉クリップの痛みは、延々と続く。先生が最初に言っていたように、午後の授業開始とか、まして六時限の終了まで放置されていたら、とても耐えられなかっただろう。いや、久美子が耐えられようと耐えられまいと、責める者が満足するまで赦してはもらえないのだが。

ガラツと扉の開く音がして。顔を上げると、さっきの教師が立っていた。また虐められるのだろうか。怯えではなく物憂い気分で、そのままうずくまっていると。教師がはいつてきて、久美子の前に鞆とくしゃくしゃの制服と乱雑に折りたたまれた禪とを置いた。そして、無言で立ち去った。

ただそれだけのことで。やさしい先生だなと思ってしまう久美子だった。

・手の届かない電話

昼休みの始まりを告げるチャイムを聞いてから、久美子は帰り支度を始めた。痛みはだいぶん引いていた。股を開く代償に男からもらったチリ紙を鞆から取り出して、犯された穴のまわりを丹念にぬぐって、汚れた紙は新しいチリ紙に包んで鞆に入れて。禪は締める気になれず、素裸の上に制服を着て、備品置き場から出た。

ひとり山道をくだる足取りは重かったが、下り坂なので登校のときよりはずっと早く、商店街まで来てしまった。

小走りに通り過ぎようとして、煙草屋の店先にある赤い公衆電話がいまさらのように目

にはいった。

海底に通した電線で、島にも電話はつながっている。けれど加入権がとても高いし、工事まで半年以上も待たされるので、一般家庭に電話は無い。電話があるのは、駐在所と学校と浜崎家くらいだろう。商店街は共同の電話を、この公衆電話とは別に持っているが。

電話で、陸の警察か役所に助けを求める——そんなことは無理と、久美子は最初から諦めている。

一〇番以外に連絡先を知らない。そして、駆け付けてくるのは駐在さんだ。いや、電話を掛けることすらできないだろう。手を伸ばしただけで、誰かに取り押さえられてしまうに決まっている。

商店街の端にある雑貨屋は、いつもと変わらず開いていた。いつも通りに、奥さんの顔が見えた。忌中でも商売をしないと、島の人たちが困るのだろう。お悔やみを述べたりしたら、かえって迷惑かなと思いましたが、黙って通り過ぎるのも人の道にはずれる。

久美子は店の前で立ち止まった。

「あの……お葬式のこととか、全然知らなくて。ごめんなさい」

奥さんは、こういった場面にはふさわしくない表情になった。微笑んだのだ。

「良かった。制服で学校へ行かせてもらえるのね」

「え、ええ……。あの……亡くなられたのは、御主人ですか？」

「ええ。長患いだったから、覚悟はしていたけれど。やっぱり、こうなってみると寂しいものね」

「あの……お悔やみ申し上げます」

立ち話をするだけでも奥さんに迷惑を掛けるのではないかと、久美子はぺこんとお辞儀をして立ち去った。

娘宿に戻って。久美子はすぐに裸になって海女褌を締めた。制服を着ていいのは通学のときだけと、女将に言われている。ときおり様子を見に来るけれど、それより怖いのは他人の目と口だった。雑貨屋の奥さんだけは、気の毒がつてくれるかもしれないけれど。

もう学校になんか行きたくない。初日から、校長先生には犯されて、級友からは虐められて、別の先生からは縛られて叩かれてお尻を使われて。しかも、何ももらえなかった。でも。当面は海女仕事を休んで学校へ行くよう、女将さんに言われている。ズル休みしたら、絶対に折檻だ。

でも……

久美子はポマードの香りを思い出した。あの感覚は、なんだったのだろうか。乳首や淫核を摘ままれたときに感じる電気ショックとは違うと思っていたけれど、思い返してみると似ているような気もする。塩をスプーン一杯も口に入れると辛くて吐き出してしまうけれど、指先でちよつと舐めるとおいしい。そういうことなんだろうか。

性行為で気持ちが良いくなる――よがるとかいけど、あれがそれなのだろうか。校長先生が特別なんだろうか。それとも、ほかの人でもあれくらい優しくさわってくれたら、ああいうふうになるのだろうか。

二か月半の強制売春を経て、久美子はようやく性の悦びに目覚めようとしているのだ。た。

・海女禪で体育授業

翌日はふつうの時刻に登校した。通学路で久美子に気づいた生徒は男女の別なく、歩く速さを変えて彼女から遠ざかった。

教室にはいつても、女子はわざとらしく顔をそむける。男子も、女子の目を気にして久美子をまともには見ない。もちろん、誰ひとり久美子に挨拶をしない。久美子としても、こんな雰囲気自分から挨拶するのは――媚びているようでもあり、意地を張っているようでもあり。黙って、最後列よりもさらに後ろにひとつだけポツンと置かれた自分の席について、チャイムが鳴るまでじっとうつぶわいてるしかなかった。

午前中の授業は平穩に終わった。久美子は仲間外れにされているだけで、男子も悪戯を仕掛けてはこない。

昼休みは、仲間外れがいつそう鮮明になった。校内であればどこで弁当を食べてもいい決まりになっているので――教室に残ったのは久美子だけだった。男たちからの貢ぎ物というよりは現物支給の売春代で、久美子は食べ物に不自由はしていない。けれど、今日は海苔で巻いた握り飯しか持ってきけなかった。みんなの様子を見て、それに合わせるつもりだった。でも、明日も仲間外れにされるのだから、貧乏たらしい日の丸弁当でも、ぜいたくなベーコン巻玉子焼きでも好きな物を持って来れる。

午後の授業が始まる十五分くらい前に、ほとんど全員が教室に戻っていた。そして、教室の間で移動が始まった。男子がぞろぞろ出て行って、代わりに隣の組の女子が入って来

る。次の授業が体育なので、男女に別れての着替えだった。女子も更衣室がないのに、久美子は田舎を感じた。

久美子は着替えなかった。体操服を持っていない。

予鈴が鳴って、いったん全員が集合する。教師は二人で、男子の受け持ちは昨日の先生だった。教室で耳にしていたモノベという名前が、顔と結びついた。多分、物部と書くのだろう。女先生のほうは、サツチャンというあだ名の印象とは違う、生真面目そうな（もしかしたら処女かもしれないと、久美子は余計なことまで考えた）三十歳過ぎだった。

久美子はサツチャン先生に見学を申し出た。

「体調が悪いのか？」

物部が割り込んでくる。体操服を持っていないことを正直に告げると、もしかしたらと思っていたとおりの答えが返ってきた。

「体操服を忘れた生徒は、下着で授業を受ける決まりだ。おまえも、そうしろ」

こういう規則の学校は、都会でも少なくはない。実際には、反省文を書くとか次の体育授業で居残って校庭を十周とかで赦してもらえる。この学校の慣例は知らないけれど、久美子には規則通りの処罰が適用されることは確実だった。

「すぐに脱いできます」

教室へ引き返そうとした久美子を物部が呼び止めた。

「授業が遅れる。ここで脱いで、制服はその朝礼台の上にも置いておけ」

久美子は、集合場所から十メートルほど離れた朝礼台まで走って行った。級友の目の前で自分から服を脱ぐことくらい、まるきり平気だ——と、自分に嘘をついて、淡々と裸に

なった。

「たしか、海女禪は下着ではなく仕事着だったな。だが、まあ特例ということで見逃してやろう」

戻ってきた久美子に、恩着せがましく言う物部。

「先生……」

女子生徒のひとりが手を挙げた。

「わたしたち、こんな人と一緒に授業を受けるのは厭です」

当然だと、久美子自身も思う。素っ裸で外を歩いて、わずかな食べ物や日用品を代償に男たちに抱かれる。そんな女とは一秒だって一緒にいたくない。折檻が怖くて逆らえないのなら、さっさと自殺してしまえばいいんだ。三か月前の久美子だったら、絶対にそう思っていた。

なぜ自分は死なないんだろう。そんな内省を、物部の声が吹き飛ばした。

「それじゃ、久美子は男子と一緒に授業を受けろ」

男子からは、わああつと歓声が沸いた。

また虐められるんだ——と、久美子はわずかな悲しみとともに、境遇を受け容れた。

久美子の騒ぎでチャイムには間に合わなかったが、点呼のあととは男女に別れての授業が始まった。女子は朝礼台のちかくでそのまま授業になったが、男子は校舎から離れた片隅に集められた。

「見えない者がいると不公平だからな」

五十人の男子が（前後でずれた）二列横隊で久美子を半円に取り囲んでの準備運動。恥

ずかしくて身体の動きが小さくなると、物部が背後から手取り足取り尻撫で乳揉んで指導する。そのたびに男子の動きが小さくなって、腰を引いても股間の盛り上がり隠せなくなる。

「今日は予定を変更して、相撲の授業にするぞ」

男子がざわついた。組み合わせによつては、久美子の肌にもふれることもできるが——はたして、何人が恩恵にあずかれるか。

物部は男子生徒全員を上半身裸にさせた。久美子を含めて、運動靴も脱がせる。

「まず、一組の出席番号一番から十五番まで、手をつないで輪になれ」

腕はいっぱいに伸ばさず、十五人で直径五メートルほどの円が作られた。

「それが土俵だ。押し出されたり投げられたりした者は、土俵が受け止めてやれ」

半分くらいの生徒は言葉の意味を察して、驚いた顔で物部を見た。それから久美子を。

「昔の軍隊で伝統になっていたという負け残り戦でやってみよう。勝つまで土俵を下りられないという厳しい戦いだ」

勝ち残りなら、疲れてきたら嫌でも負けてしまつて、次の者に土俵をゆずれる。しかし負け残りとなると——早く勝つてしまわないと疲れがどんどん溜まつて、勝機は遠ざかるばかりだ。弱い者苛めの典型だった。そして、最初の取り組みは。

「二組の出席番号で、後ろから順番に対戦だ」

この時代、出席番号は男子が先でアイウエオ順。その後ろに女子を並べるのが普通だった。したがって、この場にいる二組の生徒では、出席番号の最後は久美子ということになる。しかも。

「最初は、先生が模範を見せてやる」

体操服を脱いで上半身裸になった物部が、人垣土俵の中に立った。

「久美子、来い」

久美子は諦め顔で物部と向かい合った。物部の動作を真似する。

腰を落として、両脚を開いて。両手を前について仕切の姿勢。

「渡辺、行司をやれ」

二組の男子で出席番号が最後の者——次の対戦予定者だ。男子の中でも体格の大きいほうだ。渡辺が行司の位置に立って、右手を大きく広げたのは軍配のつもりだろう。

「ハッケヨイ」

勝てるはずはないけれど、本気で戦わないと——久美子の思考は、なんでもが体罰や折檻に行きつく。

地面を突いて立ち上がりながら、前へ突っ込んだ。両手を伸ばして、相手の胸倉を突くつもりだった。が、左右にはねのけられて、おでこが腹にぶつかった。

物部は久美子を受け止め、軽く突き飛ばして距離を取った。そして、片手を伸ばして乳房をつかみ、もぎゅつと一回だけ揉んで、手を入れ替えた。

「これが、女子に有効な張り手だぞ」

何度か繰り返してから、物部は久美子に抱きついた。両脇から手を入れて、そのまま横ミツをつかめば『もろ差し』の形だが——左手で胴を巻いて、右手で尻を何度も叩いた。

久美子は、悲鳴もあげないし抗議もしない。物部の好き勝手にさせている。

最後に物部は人垣土俵の際まで久美子を押し込んで、とんとんと突き飛ばした。

物部は計算していたのだろう。真後ろで久美子を抱き止めた男子は秀一だった。左腕で首を巻いて動きを封じてから、右手を股間に突っ込んだ。布越しに割れ目をえぐった。

「野口、本田。遠慮するな」

秀一の左右に立っている生徒が、その言葉で乳房に手を伸ばした。ひとりは強く握りつぶし、ひとりはおずおずと揉んだ。

久美子が罵られていたのは三十秒ほどだった。それから、渡辺と対戦させられた。行司は次の対戦予定者。体育教師は、土俵の中で指導をする形だが、なんの指導だか知れたものではない。

「ハッケヨイ」

彼は仲間と遊ぶときと同じように、久美子に突っ掛けてきた。

「きやつ……」

身体を起こしたところに肩を突かれて、久美子は尻餅をついた。

「取り直しだ。渡辺の立つのが早過ぎたぞ」

物部の裁定は、いわば男子への救済処置だった。

「おまえが格上なんだから、がっちり受け止めて、しっかりかわいがってやれ」

「はいっ」

ろくに肌も触れ合わず勝ってしまったとしよげていた男子は、喜び勇んで返事をした。

「ハッケヨイ」

渡辺は立ち上がって、久美子が突っ込んでくるのを待ち受けていた。

「そら、行け」

バシインと強く尻を叩かれて、しかたなく久美子は自分から相手に抱きついた。廻しをつかんで押し引きをするくらいは、電気屋のテレビで大相撲中継を見て知っている。けれど、男子は体操ズボンを穿いているだけなので、つかみ所が無い。ズボンの腰回りに親指を突っ込んで握った——のは、一瞬だけ。禪を引きつけられて上体が起きた。乳房が相手の胸板につぶされた。

「おおおおおおお……柔かい」

渡辺は上体をくねらせて、胸板で乳房を揉んだ。もちろん、それだけでは飽き足らずに、久美子を突き放して——張り手の真似事ではなく、双腕で乳房をつかんだ。もぎゅもぎゅもぎゅと、強く揉みしだいた。

久美子は、やはり無表情に突っ立って、相手のしたいようにさせている。乳房を虐められて痛いんだけど、荒縄の鞭に比べれば呻き声すらも大仰に思えた。それに。恥ずかしがったりしたら男を喜ばせるだけだと、それくらいは久美子もわかつている。

もつとも。無反応というのも、男を白けさせて、ときには嗜虐的にもさせる。

乳揉みに飽きると、渡辺は棒立ちの久美子の下にもぐり込んだ。右手で股間をつかみ、左手で肩を押さえて。

「うりゃっ」

上下逆さまに久美子を持ち上げた。そして、背中から地面に投げ落とす——寸前で、物部が抱き支えた。

「勝負あった！」

久美子をゆっくり地面に転がしてから、渡辺にきついビンタを一発だけ張った。

「これは相撲だ。プロレスごっこなんか、するんじゃない」

まだおお向けに転がっている久美子の乳房を片足で踏みにじりながら、男子生徒全員にお説教を垂れる。

「頭を打つような投げは禁止だ。それと、背骨を叩くのも禁止だ。打ちどころによっては、命にかかわる。腹を殴るときは、不意打ちは駄目だぞ。腹筋を固めさせてから、手加減をしてやれ。おまえたちが本気で殴ると、内臓破裂させかねん」

相撲の禁止事項ではなく、暴力の許容範囲の指導だった。

「先生。おっぱいを踏んづけるのは、いいんですか」

「体重を乗せなければ、踏んづけても蹴飛ばしてもいいぞ。あばら骨を折らんように気をつけること」

か弱い少女への暴力、いやリンチをそそのかされて。眉をしかめたり戸惑ったりする者もいたが、半数以上は性的な虐めを公認されて目をぎらつかせ、体操ズボンにテントを張っていた。

そうして、久美子への弄虐は延々と続けられる。

取り組むふうを装って、片手で股間をくじる者もいれば、教師を見做って尻に張り手を浴びせる者もいる。乳房はもちろん、張り手も揉み手もあった。刺激で乳首が勃ってきたのを見つけて、そこを抓る者さえいた。

股間をしつこく責められれば、官能の有無にかかわらず濡れてくる。禪の滲みを見つけて、体育教師が誤った性知識を生徒たちに教える。

「股が濡れているの見えるか。女が感じている証拠だ。こうなったら、問答無用で突っ

込んでやれ——と言いたいところだが。学校の中では絶対に淫らなことをしてはいかんぞ。さもないと、こいつが体罰を受ける」

「先生。この相撲はいいんですか？」

「これは、体育の授業だ。おかしなことを言うんじゃない。しかし、それにしても……」勝負の区切りがついたところで、物部は久美子を背後から抱いた。右手を股間に這わす。

「男子に馴染られて、こんなに濡らすとは……おまえ、こういうのが好きなのか？」からかっている様子はなく、本気ぽかった。

「好きじゃないです。でも……」

拒めば、もっとひどいことをされる。そう言いたかったのだが。体育教師は、どう勘違いしたのか。それとも、久美子の奥底に眠っている、本人も気づいていない資質を見抜いたのか。

「そうか。嫌いでもないんだな。先生も、張り切って愛の鞭を与えてやるぞ」

最後に、割れ目の奥まで指で晒布を押し込んでから、土俵際へ戻った。

久美子の負け残り相撲は、チャイムが鳴るまで続けられたのだった。

全身汗みずくで土まみれになった久美子。シャワーは、すでに閉鎖されたプールにしかないの、男子に囲まれながら足洗い場へ行った。コンクリート枠の中に、蛇口が三つ。

「先に洗えよ」

久美子ひとりが枠の中に立たされた。

「みんなで洗ってやろうぜ」

言い出しっぺは秀一だった。隅に丸められているゴムホースを蛇口につないで、ちよろ

ちよろと水を掛け始めた。

「洗うって、手拭いとかないよ？」

「手で洗ってやれよ」

その言葉で、いちばん近くにいた数人が、久美子の裸身に手を伸ばした。しかし、人数が多すぎるのが久美子に幸いした。ちよつと触れると、後ろの者が押しつけて場所を入れ替わる。じっくりねちねち嬲られるのではなく、入れ代わり立ち代わり『おさわり』をされるだけだった。股間にも常に誰かの手が這っていたが、久美子の官能は鳴りを潜めていた。

・切り裂かれた制服

そうこうするうちに予鈴が鳴った。

「やば……！」

男子は蜘蛛の子を散らすように逃げ去った。

久美子は濡れた身体のまま朝礼台へ走った。ちよつと考えてから禪をほどいて水を絞り、それで身体を拭いた。そして、制服を手にとって——啞然となった。スカートが、ズタズタに切り裂かれていたのだ。プリーツの内側に沿って腰から裾まで前後左右、六本くらいのリボン状にされていた。そんな手の込んだ切り裂き方を見るだけで、女子の仕業なのは間違いないかった。

とにかく、スカートを穿いてみた。真つすぐ立っているだけだと、普通にスカートだが、歩いたり座ったりすると、太腿も尻も股間も露出してしまふ。恥ずかしいというよりは、恐ろしかった。制服を台無しにした罪は、久美子に着せられるだろう。

上着は——やはり背中が一直線に切り裂かれていた。こちらは、立っているだけで肌が露出する。

久美子は、惨めに切り裂かれた制服を身に着けて。禪の布を顔に押し当てて、その場にならずにまいった。

「ひどい……あたし、なにも悪くないのに……」

嗚咽しながら。しかし、ほかの女子生徒から見れば、自分はけがらわしい淫売でしかない——それを自覚しているから、久美子の悲嘆はいっそう底が深かった。

十五分ほど、泣き続けてから。久美子は踏ん切りをつけたように立ち上がった。校舎へ走って、運動靴のまま上がって後ろの出入口から教室に駆け込んだ。

「なんですか。騒々しい……」

教師の叱責を無視して、自分の鞆をひたたくるようにつかむと、教室から逃げ出した。そして、娘宿まで走り続けた。途中ですれ違った人のなかには、垢ぬけた服装をした見知らぬ顔も混じっていた。定期船で陸から来た人たちだろう。物好きな観光客か、商売の直談判か。久美子にとっては、どうでもいいことだった。下着もつけずに破れた制服で泣きながら駆けていた少女の噂が広まろうと、知ったことではない。

しかし、女将にとつても島民にとつても、それは醜聞だった。

久美子が逃げ帰って一時間もしないうちに、女将が亭主と女中の花江を引き連れて娘宿

に乗り込んできた。

「おまえ、学校から逃げ帰ったそうだね」

「だって……これを見てください」

久美子は、まだズタズタの制服を身に着けていた。立ち上がって、惨めな姿を女将に見せた。意を決して訴えた。校長先生の振る舞いは、女将さんがそのかしたに決まっている。物部先生も、校長先生とゲルなのかもしれない。でも、女子生徒まで操れるだろうか。秀一さんがそのかしたとも考えられるけれど、いくらなんでもやり過ぎだと思った。

しかし、女将はそう思わなかったようだ。

「なんだい。ちよつと制服が破れたくらいで」

久美子はいつもの——諦めと絶望の底に沈んだ。

「明日からちゃんと学校へ行くんなら、今日のとこは大目に見てやるよ。明日も、どうしても行きたくないんだったら、うちへ来な。亭主と女中と、総出で放課後まで折檻をやる」

「……ちゃんと行きます」

久美子には、そう答えることしかできなかった。泣き伏しそうになるのは、それを理由に折檻されるのを恐れて、かろうじてこらえた。

女将が引き上げると、久美子はのろのろと裸になって海女禰を締めた。悲しみも諦めも恥辱も、なにかも突き抜けて、久美子の心は死んでいた——のだが。鞆の端から紙切れがはみ出ているのに気づいて開けてみると。教科書もノートも引き千切られていた。

久美子は、六枚まで増やしてある畳の隅に積んで置いた虫食い布団を延べて、そこに突

つ伏した。日が暮れても、空腹すら感じなかった。

夜這いは八時頃に三人と十時前に一人。久美子はいつにも増して、男たちのしたいようにさせて、自分はまったく動かなかった。

「なんでえ。これじゃ南極一号と変わらねえよ」

そう言つて、脇腹を蹴飛ばして帰った男もいた。南極一号というのは、南極観測隊が持つていった性処理用の空気人形のことである。

越冬隊の名誉のために付言しておく、人形は服を着せられ部屋の隅に飾られて、処女のまま帰国したとされている。

男たちに使われたまま、跡始末もせずに横たわっていた久美子だが、十二時頃に海へ行って用を足して、それからは朝までずっと死んだように動かなかった。途中で眠ったかどうかさえ、はっきりしなかった。